# 協育NEWS

「協育」という波紋を拡げます

会報誌第24号
2016年9月30日発行
発行：NPO法人 大分県「協育」アドバイザーネット


## 会員のみなさんへ

### 日本生活体験学習学会第１回地方セミナーからの学び

理事長　中川　忠宣

由布市会場　2016年8月3日（水）

【シンポジウムの概要】

登壇者　日本生活体験学習学会 古賀 倫嗣 理事（熊本大学教授）
由布市立狭間小学校　三ツ木　隆 主幹
由布市立阿蘇野小学校　那須　恵子 教諭
佐伯市立宇目緑豊小学校 伊東 俊昭 校長
（NPO法人大分県協育アドバイザーネット会員）

ファシリテーター：中川 忠宣 理事（大分大学特任教授）

安達事務局長の報告がありますが、ファシリテーターとしての私の視点から会員のみなさんに具体的な討議内容を報告します。

**＜第1ステージ＞　登壇者の立場からの報告から考える**

各登壇者からの報告に対して、積極的な教員とそうでない教員がいる場合の対応としては、「教育課程に位置づける」「誰にでも出来るようなプログラムを作っておく」「成功経験を共有する」「コーディネーターの配置と活用が重要」等の意見交換が行われた。さらに、保護者や地域では、基本的な生活習慣や日常に体験活動の取組が難しいことも充分考えられることについては、「学校が担うことが求められるが、学校だけが担うのではない」ことを共通理解して「突破口としては学校が取り組み、地域や家庭と協働して広げていくことが重要である。コミュニティ・スクールはそうしたシステムを造るために重要である。」等の意見交換が行われた。

**＜第2ステージ＞参加者と共に「教育課程に体験活動を組み込む時の課題」を考える**

参加者から、「支援者の発掘」や「体験活動の学びに関する質の保証」等に関する質問があったが、総合的に古賀理事から、「コーディネーターが重要である。コーディネーターは探すものではなく、育てるものである。」という助言があった。また、学力とコミュニティ・スクールの関係について、「教育課程に体験を位置づける場合は、内容としての位置づけと方法としての位置づけがある。」ことや、「学力とコミュニティ・スクールの取り組みを繋ぐ有効な教育活動として言語活動があり、子どもは言語活動によって揺さぶられ、五感が鍛えられる。」という提言があった。

**＜第3ステージ＞コミュニティ・スクールに有効なプログラムと協働の方策を考える**

有効なプログラムについては、「多様なゲストティーチャーに入ってもらう。」「教育課程の中には、色々なプログラムを考えるヒントがたくさんある。」や、「普通の授業や普通の学校生活では出来ないことを取り入れる視点が大切である。」などの意見が出された。さらに、地域の方々との協働づくりについては、「担当者が楽しむ。」「地域住民の方々には『支援してください』ではなく、『一緒に楽しみましょう』と呼びかけることが大切である。」という視点からの意見が出されたまとめとして、古賀先生から「市町村教育委員会が仕組みと基盤をつくること」「PTA活動を活性化すること」の2点の重要性を指摘された。

**【総 括】**

こうした、既存の学会や教育委員会と共催したセミナーの実施等を通して、私たちのNPOの活性化や会員の学びに生かしていく取組を継続していきたいと思っています。（中川）

由布市挾間健康文化センター"はさま未来館"にて日本生活体験学習学会地方セミナーが開催されました。今年度より日本生活体験学習学会では社会貢献活動の一環として，学会と地域との共催事業を地方セミナーと位置づけ、当学会と、私たちの「NPO法人大分県協育アドバイザーネット」、由布市教育委員会の3者の共催で実施されました。当日は、学会関係者のみならず由布市教育委員会　加藤淳一教育長をはじめ、由布市学校教育関係者30名、NPO法人大分県協育アドバイザーネット会員7名、日本生活体験学習学会会員11名の計48名で、学校教育における「体験の推進」について，義務教育9年間を見通した教育課程の編成と，そのためのコミュニティ・スクール（以下、CSとする）の意義を会場の皆さんと一緒に考えるセミナーとなりました。

長尾秀吉理事（別府大学教授）より、生活経験の不足と発達の変化や子どもの生活体験学習をめぐるさまざまな問題は、発達の基盤としての生活体験学習（体験知）の保障にむけて子ども・保護者・地域・学校も各主体の連携が不可欠であることなどをどのような観点から今回の地方セミナーの協議についてのテーマ説明等がありました。第1ステージの**キーワードは「体験」**。登壇者の由布市立狭間小学校　三ツ木隆主幹は、体験不足による、学校教育で感じる子どもたちの課題を基に学校教育での子ども自らが行動する「体験活動」のしかけを取り入れる考え方や方向性についての報告があり、由布市立阿蘇野小学校　那須恵子先生は、教育課程に沿った体験による学びの事例から見えてきた成果と課題についての報告を拝聴しました。また、佐伯市立宇目緑豊小学校　伊東　俊昭校長（NPO法人大分県協育アドバイザーネット会員）は、教育活動に体験活動を取り入れることの意義と課題について説明を伺いました。日本生活体験学習学会　古賀　倫嗣理事（熊本大学教授）は、体験活動を日常的に取入れる事例から、子どもへの必要性・教員組織としての必要性を教育課程で必要な体験活動を基にして、その重要性についての説明がありました。古賀先生の各ステージについてのコメントが大変参考になりました。中でも、体験活動を教育課程に位置付けるためには、教員の意識改革と、子どもたちの現状や課題（学校の要望）を地域・保護者・学校が同じ目標を持ち、子どもの「生きる力」や「成長」を共有・共感することが重要であるということには、おおいに納得でした。CSの取組でプログラムの内容や方法を具現化し、体験の質が保障され充実していく。このことがCSの活かし方であり、CSに係る者の役割だと実感しました。（安達）

# 会員さんの活動紹介

**縄田 早苗さん（５期生）**　　**別府市立中央小学校所属 大分大学教育学研究科専門職課程在学**

第７回 人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい（結い）」７月３１日大分大学にて「協育」ネットの会員でもある縄田さんに『出会いとつながりの中で私が学んだこと、そしてこれから』という演題でお話をしていただきました。いろいろな職種を経験された縄田さんのお話はとても興味深いものでした。その中でも教師時代の経験談…特にある男の子との話に感銘を受け、改めて本の素晴らしさを実感しました。また、我々読書支援ボランティアが読み聞かせなどを行う時、心掛けたいことも学ばせていただきました。お話の最後を「地域の住民として、子どもたちを豊かに育んでいくために、主体的に当事者意識をもって、協働していこう」という言葉で結んでくださいました。ネットワーク「ゆい（結い）」を含む『人と本を結ぶ読書支援プロジェクト「ゆい（結い）」』は、これからも「子どもと本を結び、子どもと本を結ぶ人を増やし、そして、その人たちを結ぶ」ことを目標に活動していきたい思います。（佐藤）

今回は5期生の縄田早苗さんが大分大学で開催された読書支援ネットワーク「ゆい(結い)」の会合に講師として参加する事となり取材に行ってきました。学校教育・社会教育に精通した縄田さんの話は協育ネットに関わる私も興味深くお話を聞く事が出来ました。学校現場で落ち着きの無いクラスを受け持った時に毎朝読み聞かせを続けたという話はメモメモでしたね～、これは家庭でも地域でも、年齢に関係なく本の読み聞かせが人の心を落ち着かせるんだなと思いました。そういえば昔、紙芝居にワクワクしてた思い出が･･･今回も気づきの多い取材でした。（上原）

# 日本生活体験学習会 第18回研究大会

## コミュニティ・スクールにおける生活体験の可能性

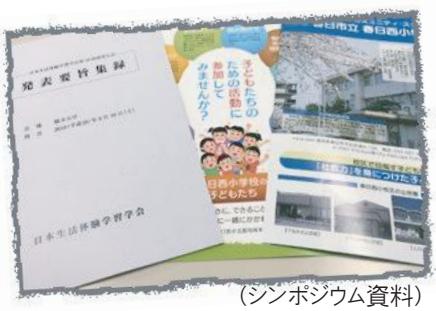
■ 熊本大学　■ 2016.9.10(土)

公開シンポジウムに参加してきました。

（シンポジウム会場の様子）

2016年9月10日熊本大学教育学部にて、日本生活体験学習学会第18回研究大会が開催されました。公開シンポジウムのテーマが「コミュニティ・スクールにおける生活体験の可能性」であり、シンポジストに山崎清男先生（大分大学）コーディネーターに長尾秀吉先生（別府大分）のお名前があり、中川先生も参加されると知り、「どなたでも参加できます」の文面に勇気をいただき参加いたしました。長尾先生のお話で「コミュニティスクールには教育環境を取り巻く複合的な問題状況に対応していく地域社会総掛かりの連携が必要。どのような子どもを育てるのか？単なる学校へのお手伝いではなく、それを越えて学校応援団的なものとしての存在にならなければならない。コミュニティスクールに期待されていることは、子どもにとっては「学習や体験活動が充実する」「自己肯定感や思いやりの心が育つ」地域住民や保護者にとっては「自分の経験を学校で活かすことによる自己有用感の増進」さらに地域全体には「防災、防犯により安全な生活実現」、「地域のよりどころの形成」などがあり、連携の手段だけでなく、目標達成に不可欠な教育方法として、さらにコミュニティ形成にむけて経験や体験が重要なキーワードになっている。ですが、教育現場ではコミュニティスクールやその可能性についての理解が深まっているわけではない。学力重視にシフトしつつある学校教育においては、生活体験をカリキュラムに組み込むことへの抵抗もあるかもしれない。今回はコミュニティスクールにおいて生活体験がどう位置づけられ、どのような効果を挙げることが期待されているのか、政策と実際の両面を見ながら探っていきたい」と聞き、コミュニティスクールの必要性は理解していても、なかなか浸透できない現場の状況に何か学んで持って帰りたいと思いました。熊本県大津町立護川小学校と福岡県春日市立春日西小学校の事例報告は、コミュニティ・スクールが円滑に活動していることでの成果の多さと継続していく課題があることもわかりました。コミュニティ・スクールが「子どもたちの夢を実現する応援団」として機能するためには①運営から経営へと意識を変えること。（役割を明確化し、当事者として意識する。事務局を作り、教員やPTAなどの仕事の軽減を図ること。権限や予算の問題も対処すること。安全管理などの問題も軽視できない。）②PTAからPTCAへと変わること。（Cをどこに位置づけするかということ。）③感謝から共感へと変わるように意識すること。（子どもからの大人へありがとうと伝えるだけでなく、大人から子どもへ役に立ててよかった。ありがとうとお互いに伝えることで共感ができる。）を教えていただきました。

（会場の質問に答える別府大学長尾教授）




（シンポジウム資料）

コミュニティ・スクールの基礎作りには、コミュニティ・スクールの重要性を理解している核となる人材が必要不可欠であり、成功例の学校にはPTA役員経験者など現役や保護者OBの方々の支援を超えた努力と苦労の姿が必ず見えます。行政の支援協力も不可欠ですが、人と人の繋がりが輪、和、笑を広げていく力だと信じています。子どもたちが自分の良さを伸ばし、自分で物事を判断して、自尊心を持ち他者を思いやる人へと成長していくことを願っています。そのサポートができるコミュニティ・スクールの実現には何年もの積み重ねが必要です。できることから、一つでも形にすること。仕事を退職したら今よりもっと充実した時間が送れそうな予感です。困って、泣いて、苦労しても最後は笑えるようにする！笑う門には福来たる！を合言葉に頑張れるチームが目標です。（江口）

## 事務局よりお知らせ

当事務局の連絡先が変わりましたのでお知らせします。
**０９０－４３５７－２３６５** 受付時間(10:00～17:00)
よろしくお願いいたします。

## 広報部よりお知らせ

熊本での公開シンポジウムの様子を撮影許可を頂きビデオ撮影しました。協育ネットホームページ会員用ページをご覧ください。
ログインパスワードを忘れた方はこちらにアクセスしてください。
https://www.youtube.com/watch?v=KxlCd8GIddU